2007年度 豊橋市民大学トラム 愛知大学連携講座（2回）

孫文を支援した山田兄弟

東亜同文書院大学記念センター運営委員 馬場 毅

【司会】 皆さん市民大学トラムにお越しいただきましてありがとうございます。本日は第2回目ということで、本学現代中国学部教授の馬場毅先生にご講演をいただきます。馬場先生は中国近現代史、とりわけ中国近代史における秘密結社史、抗日戦争を専門にしておられます。今年4月より現代中国学部の学部長となられました。同時に東亜同文書院大学記念センターの研究員も兼ねておられます。本日は中国の革命家として有名な孫文との関わりという側面から、東亜同文書院についてお話をしていただく予定です。それでは先生お願いいたします。

【馬場】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介にあずかりました馬場でございます。今回は2回目ということで、藤田先生のお話に続きまして私がお話をさせていただきます。パワーポイントを使ってお話をしたいと思いますが、だいぶ年配の方が多く、字が小さくて見にくいのではないかと思います。これでもちょっと工夫をして、一頁に6シート入れるところを4シートとさせていただきましたが、同じものが大きな画面に出ますので、そちらのほうをご覧いただければと思います。随時またそれに説明を加えさせていただきます。

本日のテーマは「孫文を支援した山田兄弟」です。山田良政および純三郎についてはご存じの方も多いかと思いますけれども、愛知大学の東亜同文書院大学記念センターに弟の純三郎関係の文書および資料が所蔵されております。これは純三郎の四男の順造さんが亡くなった時に、愛知大学に寄贈されたと聞いております。当時私はまだ愛知大学のほうにお世話になっておりませんでしたけれども、大変貴重な資料でありますし、かつ両者とも東亜同文書院に関係がありますので、本日採り上げさせていただきたいと思います。

はじめに

まず、東亜同文書院の設立の目的を簡単に振り返ってみたいと思います。1901年の設立趣意書によれば「日清戦争後の列強からの分割の危機に際して、中国保全と日中の共存共栄を掲げ、そのための政治経済面の実務家を養成する」というのが、東亜同文書院の設立の目的でございます。日清戦争が1895年に終わり、そのあと中国は欧米列強および日本による分割の対象になっていく。そういう中で分割の危機に対しての中国保全、および日中の共存共栄というのが目的でありまして、そのために人材を養成するというのが設立の趣旨かと思います。

しかしながら私は、1901年の設立の時から、実はある矛盾があったというふうに考えております。それは中国の保全ということを言いながら、すでに日本は1895年の下関条約の結果、台湾を植民地化しております。さらに台湾の対岸である福建省を自己の勢力範囲に入れつつあるという意味では、中国分割に参加しているわけでありまし

て、別の言い方をすれば、設立の趣旨である中国の保全ということに敵対する行動をとっていたというふうに思います。設立の時から持っているこのような矛盾、すなわち中国の保全を片方に掲げながら、他方において政府の行動自体がいわば中国の一部を植民地化しているという矛盾に対して、当時の東亜同文書院の関係者が批判的な言動を行なった事例は、寡聞にして一切見られません。自国政府の政策と大学設立の目的との矛盾が、思想的にも充分に突き詰められていなかったというふうに思います。

ただし、設立の時から大まかに言って1920年代までは、私はこの矛盾がそんなに大きく表面化してこなかったと考えております。そのことと関連しますが、1905年に日露戦争が終わり、その後日本はさらに遼東半島を、それから1910年には朝鮮を植民地化していく。そういう意味で帝国主義化していく。そういう日本政府の政策は東亜同文書院の掲げた中国保全および日中の共存共栄と、矛盾対立が拡大していきます。とりわけ1931年の満州事変以後はそのことが大変顕著であると考えております。

満州事変以前の20年代、東亜同文書院には中国人の学生を養成するための中華学生部が設置されておりました。しかしながら31年に満州事変が起きると、次々と彼等は退学していき、結局中華学生部は存続できなくなっていく。中国人の学生にとって満州事変以後は、いわば自国を侵略し、満州を領土化していく、そういう国の教育機関に身を置くこと自体、当然周りの中国人からもいろいろ批判されるし、自らもそれを潔しとしないという状況に追い込まれていきます。1920年代まではとりあえず日中の共存共栄と中国の保全という東亜同文書院の掲げた目的と、日本政府の政策とは、矛盾がそれほど表面化していないと考えておりますが、30年代の満州事変以後はそういう矛盾対立が非常に激しくなっていき、特に1937年以後の日中戦争になると、それはもう抜き差しならぬ対立になってしまう。設立の趣旨と日本政府の政策との対立という観点から言えばそういうことが言えるわけですが、ただし東亜同文書院という教育機関にいた人間は、今で言う左派から右派まで非常に幅が広い。そこが東亜同文書院の魅力でもあるし、特色でもあると思います。

Ⅰ　山田良政

その中で今日お話しします山田兄弟、すなわち良政と純三郎ですが、良政は1900年に死んでおります。純三郎は1960年に死んでおりますが、戦後も生きております。ただし孫文との関係で言いますと、孫文は1925年に死んでおりますので、彼等の孫文との関わりという点で考えますと1920年代までかと思います。彼等は本当に命懸けで、実際に兄である良政のほうは、孫文の指導する革命に参加して、自ら命を捧げているということがあります。そういうふうに身命を賭して孫文の革命運動に協力した人物です。孫文に協力した日本人というのはたくさんいるんですけれども、それが戦後あまり中国側あるいは台湾も含めてそういうことについて言わないということについては、私はちょっと残念に思います。いわば日中戦争を経た時点から考えて、台湾のほうは国父である孫文に対して日本人が援助したというのはあまり言わない。台湾は孫文の創立した国民党が非常に政権を長く持っていましたから、まだ比較的触れますが、中国側はあまり言わない。ただ文革以後、特に80年代以後はそれなりに評価をしてきていると思いますけれども。従来日本人の孫文の革命への支援ということは、日本側の研究者は非常に言いますが、中国側ではあまり言っていないという傾向があります。そのような状況下で、愛知大学および東亜同文書院に関係のある純三郎さんの資料が私共のところに保存されているということもあって、本日取り上げさせていただきたいと思います。

1. 東亜同文書院との関係

山田良政

この写真が山田良政です。帽子を被っていますけれども、脱ぐと清朝の辮髪をしています。山田良政はかなり中国語をしゃべれたと思います。中国人と同じような格好をしていました。ここで山田良政の略歴を簡単に紹介しますと、1868年(明治元年）に生まれまして、1900年に戦死をしております。青森県弘前の出身です。特に東亜同文書院との関係では、1890年に荒尾精らの設立した、中国語や中国の商事慣行を学ぶ日清貿易研究所(これは東亜同文書院の前身の1つです)に通っています。ここで中国語や中国の商事慣行を学んでいるんですが、それ以前、彼が最初に中国と関わりを持ったのは、北海道昆布会社に就職をして上海支店に配属され、そこで昆布等を買い付けるわけですけれども、海産物を買い付ける時に中国語や中国の商事慣行を知らなければ商売がうまくいかないということで、日清貿易研究所に通っていく。これが1890年です。90年と99年のあいだに日清戦争が起きています。この日清戦争の時に山田良政は陸軍の通訳官として東北地方に派遣されている。日清戦争が終わったあとは台湾に派遣され、そこで軍人である滝川具和と面識を得ます。そしてこのあと滝川と行動を一緒にしていく機会が大変多くなります。99年7月に東亜会と同文会が合併した東亜同文会（日清戦争後に中国と関係を持ちながら日本の国際的地位を強化しようとする）に参加しております。この会長が貴族院議長である近衛篤麿で、その号が霞山であることから霞山会という会の名前、あるいは東京の霞山会館という名称が後世付けられることになります。

1900年にこれも直接の東亜同文書院の前身になりますが、南京同文書院というのができます。そして教授兼寮の舎監（管理人）となります。その後8月に孫文（別名孫中山）の率いる革命への参加のために、南京同文書院を辞します。今、台湾も中国もあまり孫文とは言わないで孫中山と言います。実は中山というのは日本人の姓です。1910年代に孫文が日本に亡命して居住した時、いつ袁世凱の意を受けた刺客が送られてくるかも知れない。従って孫文という名前では、家を借りても表札がかけられない。孫文が日本の町並みを歩いていたら、たまたま中山という姓が日本人に多いので、自分の偽名として中山樵（樵という名前はあまりないと思いますが）と名乗ります。台湾でもそうですが特に大陸のほうでは、孫文と言わないで孫中山と呼称しております。中国は今、孫文の生まれた広東省の香山県を中山県と称しております。孫文の故郷です。けれども中国の人は、この中山というのは孫文が日本人の姓をとったということについては全く触れていない。ただ戦前孫文と一緒に行動した人達のあいだではこれは大変有名な話で、つまり孫文が偽名として日本人の中山というのを付けたということです。

2. 戊戌政変時

良政は8月に孫文の率いる革命参加のため南京の同文書院を辞しています。良政が死ぬのが1900年10月20日ですので、これから3か月足らずで亡くなるということになります。彼が中国の革命運動に関与する直接のきっかけは、1898年の戊戌の変法（康有為や梁啓超達がやった改革運動）です。これが保守派の西太后なんかによって弾圧されていきます(戊戌政変)。保守派のクーデターの時、改革派のリーダーを全て捕まえようとするわけですが、康有為や梁啓超は日本に亡命します。亡命しなかった譚嗣同という人物がいて、彼は逃げろとみんなに勧められたんですが、革命の時に流血というのは必ずあることだからと、逃

げないで捕まって処刑されています。保守派のクーデターの時には変法派の人達は当然逮捕されるし、逮捕されれば命も危ないという状況でした。良政は滝川具和や平山周と協力して、変法派の王照という人物を匿います。

滝川具和は日本大使館付きの海軍武官でした。これは先ほど申し上げたように良政が日清戦争後の台湾への派遣で知り合った人物です。平山周は『支那革命党及秘密結社』という本を出しています。孫文の率いる「支那革命党」は、最初は1894年にできた興中会が、1905年には中国同盟会（東京の渋谷の近くで設立）となります。平山周は1897年に孫文に会っています。その時は興中会の段階で、孫文は特に会党とも呼ばれる秘密結社を革命の原動力として重視していました。具体的には例えば惠州蜂起とも関係しますけれども三合会（別名天地会）、哥老会などです。三合会とか天地会というのは、参加者がみんな洪という姓を名乗るものですから、20世紀になるとよく洪幇と呼ばれます。哥老会も天地会を真似してできたので、参加者はみんな洪という姓で、洪幇と呼ばれます。後になると音が一緒である紅の字を使って紅幇と言われるようになります。三合会は南の広東省で非常に勢力が強かった。哥老会は長江流域の湖北省、湖南省、四川省あたりが中心です。

広東省は非常に三合会が多く、孫文はハワイで教育を受け香港に戻ってきてお医者さんの勉強をするんですが、その時の仲間に三合会の会員がいたと言われています。そしてこの連中が一応大義名分として、自分達の結社の目的は反清復明だと言う。反清という点においては孫文のやろうとする革命と共通だということで、孫文はこの秘密結社の連中と手を組みます。ただしもう19世紀から20世紀ですから、いくら漢民族の国家だとしても、再び皇帝制の政治なんていうのは時代錯誤だと。孫文は三民主義において、三権分立（正確に言うと五権分立）による欧米型の共和制国家を目指していますから、会党と言われる秘密結社の連中に盛んに思想工作をやっています。

平山周が1897年に孫文に会った時、孫文の近辺に三合会とか哥老会の連中がたくさんいました。これは清朝から言うと非合法であるし、この連中のことを秘密結社というふうに名付けた。平山周のこの本はのちに中国語に訳されました。秘密結社という言葉はそもそも日本語だったと言われています。それが中国語に入った。ただ現在は秘密結社とはあまり言わないで、秘密社会なんていう言い方をしています。この段階で平山周は孫文と行動を共にする機会が大変多かった人物です。この時はいわばクーデターが起きて、次々と変法派のリーダーを捕まえようとして、清朝の役人や軍隊が動員されている。

その時山田良政は滝川や平山と共に危険を冒して、北京から夜、王照と共に天津に行きます。これは間一髪で、北京にいた時もし遅れていたら捕まる可能性が充分あり、かつ途中で見つかれば日本人も一緒に捕まることになります。北京から天津に行かせ、当時天津港に停泊していた日本の軍艦大島に収容します。梁啓超も日本公使館に保護されていたため、同じように大島に収容されて日本に亡命します。山田良政はこの事件で、孫文を支援していた大陸浪人と呼ばれるグループの中でも名前が知られていきます。この場合直接的には変法派のグループですが、当時変法派を支持していたグループと、孫文達のグループを支持していたグループとは、この段階ではあまりはっきり分かれていません。変法派を支持している連中は、だいたい後になると孫文を支持するグループに変わるのが多かった。これが最初の、山田良政が中国革命に関与していく事件になります。

ところが孫文と変法派、つまり革命派と変法派のあいだでは、今後の改革のプランが対立していました。変法派（後に立憲派）というグループは清朝の存続を前提にしていまして、そのもとで改革をしていく。後の立憲派の段階になってくると非常にはっきりしてきますけれども、憲法を制定

して議会を開くという。議会を開くという点では孫文と共通しています。ただ孫文は清朝の存続を前提にしていない。清朝を倒す、革命をするということを前提にしています。1900年以後変法派と孫文のグループとで一緒にやろうという企てがあって、日本人が仲介して変法派の親分である康有為と孫文を日本で会わせて話をしようという計画があったんですが、康有為が拒否したために、この両派は結局1900年以後対立していきます。

3. 孫文との出会い

山田良政は1900年6月に上海の旅館で孫文と会って、孫文から革命蜂起の構想を打ち明けられます。孫文に会った日本人は例えば宮崎滔天というのがいますけれども、彼の書いた有名な自伝『三十三年之夢』の中で、孫文に初めて会った時のことを記しています。1897年か98年だったと思いますが、孫文が横浜で中国人の家に匿われていた。ある朝孫文に会いに行くと、孫文が顔も洗わないで、口もすすがないで、寝間着のまま宮崎滔天に会い、英語で話しかける。それではあまり失礼だというので着替えてくる。孫文は洋装をしております。頭をポマードかなんかで撫でつけて、それで会う。宮崎滔天は孫文の名前は前から知っていたんですが、大変がっかりする。なぜかと言うと「孫文は東洋の豪傑風な風采をしてなくちゃいけない。ところが現れてきたのは西洋型の紳士である」。それでがっかりするんですが、孫文に対して今後どういうふうに革命をするのかということを尋ねると、孫文はまさに三民主義による共和革命ということを説くわけです。「初めは処女の如し。続いて脱兎の如し」というふうに宮崎滔天は書いています。熱を帯びたその話しっぷりに魅せられてしまう。1日で宮崎滔天は孫文のファンとなり、宮崎滔天のほうが早く死にますけれども、死ぬまで孫文の支援者だった。だいたい日本人で孫文の支援者になるのはそういう形で、話を聞くともう1日で支援者になる。孫文はものすごい熱弁だったようです。気が向けば何時間でも話すというのが有名です。三崎町の家で孫文と会った時の山田良政も、たぶん同じような状況だったんだと思います。そしてこれを契機にして革命派支援に変わっていきます。この時に弟の山田純三郎はまだ正式に紹介されなくて、隣の部屋にいて障子に穴を開けて盗み見たということです。これが1899年7月ですが、その後1900年6月に上海の旅館で孫文と会い、この時に純三郎を孫文に正式に紹介しています。

ところが東亜同文会は外務省の下にありますので、日本政府の政策と非常に密接に繋がっている。日本人が反清の革命をやるということについては、日本政府はこの段階では反対しているわけで、東亜同文会は外務省の意を受けて山田良政や南京同文書院の学生の革命運動への参加を禁止しますけれども、山田良政は結局同文書院の禁止令に従わなかった。そして具体的な革命に参加していくのが惠州蜂起です。広東省の惠州で武装蜂起をする。この年華北のほうでは、清朝と義和団が8か国連合軍と戦争状態になっています。ただし当時の中国の状況では、全中国を挙げて8か国連合軍と戦っているわけではなくて、南方のほうは必ずしも参加していない。例えば当時李鴻章が広東にいるわけですけれども、これに対してイギリスの香港総督と孫文も絡んで、李鴻章をリーダーにして広東と江西の2省を独立させようという計画が、蜂起の前に練られています。ところが8か国連合軍との戦いは清朝側に大変不利になって、西太后も北京を逃げ出していくという状況で、今度は講和条約を結ばなくてはいけないということになり、李鴻章が北京に召喚されます。それでこの計画は、計画倒れに終わります。

4. 惠州起義に参加

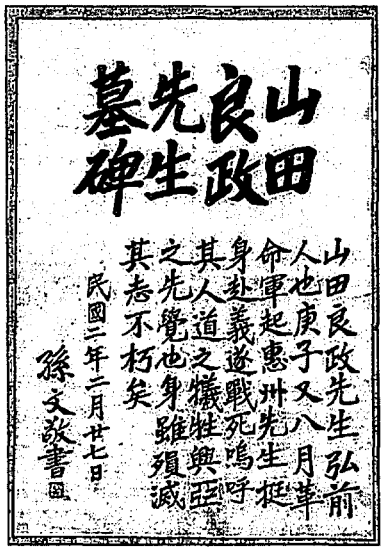
そのあとに起きるのが惠州蜂起です。北方で戦争が起きていて、清朝は南の広東省の統治が手薄になるのでその隙を突く。この時山田良政が仲介

して、台湾総督の児玉源太郎と、台湾総督府の民政長官であった後藤新平と、孫文とが会う。台湾は95年から日本領になっていますので、それから5年後の話になりますけれども。後藤新平と山田は郷里が同じということもあって前から面識があった。児玉総督は、蜂起した起義軍が広東省の海豊、陸豊まで来たらば、2個師団分の武器供与と、日本軍人が起義軍へ参加することを約束します。孫文の指示を受けた鄭士良が、秘密結社である三合会員（広東省に非常に多い）らを率いて惠州で蜂起したのが10月6日です。約束通り日本側が武器を供与してくれるだろうし、日本軍人が自分達の軍事指揮官として参加してくるだろうということ、さらに当時孫文は台湾にいましたけれども、台湾から海を渡って孫文が参加してくるだろうということを期待して、福建省の厦門を目指しました。

日本からの援助、すなわち台湾総督府からの援助を期待して蜂起をするんですが、この時日本の内閣が山県内閣から伊藤内閣に変わります。日本が援助する代わりに福建省に日本の利権および勢力範囲を拡大するということが、児玉総督およびその背後にいる日本政府の政策だったわけですが、伊藤博文は、そのようなことをすれば英米あるいはロシアなどの列強から、日本が勢力の均衡を破るのではないかと干渉されるということで、児玉総督に対して、孫文への武器供与と日本軍人の起義軍への参加を禁止します。蜂起した連中は日本の台湾総督府からの援助を期待していたわけですが、実際に蜂起して清軍と戦いながら北上していくと、まさに2階へ上がって梯子を外された感じで援助が来ない。その話が山田良政および孫文に伝わります。そして山田良政は孫文の命によって、児玉総督の方針変更と、起義軍に対しては臨機応変の処置をせよということを伝えるため、海を渡って起義軍のもとに行きます。これが10月20日です。

鄭士良は、弾薬も尽きつつあり、日本からの武器援助も来ないということが解かった段階で、目的を果たすことは不可能だと、軍を解散して惠州に戻るんですね。惠州の東方の三多祝というところで清軍に攻撃され、山田良政および参加していた三合会などの中国人を含めて6人が捕虜になります。捕虜になった時、山田良政は一言も発しなかったと言われています。もし山田良政が自分は日本人だと言えば、国際問題になりますので殺されることはなかった可能性があると言われています。ところが実際には一言もしゃべらない。どうしてしゃべらなかったかというのはいろんな説があるんですが、有力なのは、山田良政は中国語がかなりうまいですけれども、やはり日本人のしゃべる中国語ですから、しゃべれば中国人ではないと分かる。自分は日本人の1人として、児玉総督の結果的な裏切りに対して申し訳ないと思っていたというふうに推測されるわけです。結局革命に殉じて殺されます。その死体は密かに葬られましたが、この時彼を殺した清軍の軍人が、清朝滅亡後の1918年には孫文の部下になっていて、弟の純三郎に会った時に、自分はあんたの兄貴を殺したということを言うわけで、そこまで行方不明だった。孫文の指導した革命に限定しても、何人もの日本人が実は命を捧げているわけですけれども、山田良政は日本人で中国革命に殉じた最初の1人です。

これが孫文の「山田良政先生墓碑」です。民国二年になっていますから1913年で、孫文は辛亥革命が一応成功したあと日本に来ます。まだ良政が死んだかどうかよく分からない時なんですけれども、行方不明で全然消息が分からない。たぶん死んだのだろうということになっていました。墓碑を簡単に読みますと「山田良政先生は弘前の人なり。庚子また8月」。庚子というのは1900年です。また8月というのは、この年は閏年で8月は2度ある。2番目の8月は西暦に換算しますとちょうど9月から10月で、惠州起義軍が蜂起している段階です。「革命軍惠州に起こるや先生



山田良政墓碑

挺身して義に赴き遂に戦死す。ああその人道の犠牲興亜の先覚なり。身は湮滅すと雖もその志朽ちず」。孫文が山田良政を大変評価している文章だと思います。山田良政が1900年に死んだ後の話です。

Ⅱ　山田純三郎

1. 東亜同文書院との関係

次に弟の純三郎のほうですが、1876年に生まれて、戦後まで生きました。東亜同文書院との関係で言いますと、1900年に南京同文書院に入学し、それが東亜同文書院になりますので、東亜同文書院の1期生ということになります。その後兄が行方不明扱いになっているわけですが、1901年、兄良政の影響もあって中国革命に興味を持ち、そのため学業に身が入らず、東亜同文書院を成績不良ということで退学になる。そのあとが面白いんですが、院長根津一の計らいで事務員兼助教授になる。退学した人が助教授になっちゃうということですので、成績不振者が今度は東亜同文書院で教えるという、今ではとても考えられないことが起きます。その後1904年5月に日露戦争に従軍のため東亜同文書院を辞職し、日露戦争中は福島少将のもとで通訳官をしております。その後1907年1月に東亜同文書院の教授となります。ただし5月に東亜同文書院を辞めて満鉄に入社します。この時の満鉄の初代総裁が、兄良政とも関係のあった後藤新平です。後藤新平からは、純三郎は良政の弟かということで、初対面の時いろいろ聞かれたということです。

2. 革命運動への参加

孫文との関係で言いますと、繰り返しになりますけれども1899年7月に兄良政が、東京神田三崎町の家で孫文と会った時に、障子の陰から穴を開けて孫文を盗み見た。「大変頭のでかい男だ」というのが孫文の第一印象だそうです。その後1900年に上海の旭館という旅館で、兄良政により孫文に紹介される。この写真の左側が純三郎、右側が孫文です。孫文も純三郎も明治の人ですが、洋装が大変似合うと思います。孫文はたぶんこんな格好をして宮崎滔天に会ったんだと思います。辛亥革命が1911年の10月に起こりますけれども、それ以前は純三郎は直接革命運動に参加した形跡がありません。1911年の11月3日、革命派の陳其美（この人物は大変純三郎と関係があり、蔣介石の親分格に当たる人物ですが、後に上海の純三郎の満鉄の社宅で暗殺者に殺されます）が清朝の江南機器局（武器を作っているところ）を襲撃し

山田純三郎と孫文

た時、実は事前に日本の総領事に話が通っていました。まだこの段階では清朝が倒れていません。国家間関係から言えば、日本の総領事が、革命をやろうなんていう奴に拳銃を貸します。拳銃3丁を借りて陳其美に渡しています。純三郎が実際に革命運動に参加したのはこれが初めかと思います。

3. 辛亥革命後

孫文は辛亥革命が起きた1911年10月の段階で外国にいますが、12月にアメリカからヨーロッパ経由で帰国した時、純三郎は宮崎滔天と共に香港まで迎えに行き、船で上海まで一緒に行っています。孫文は純三郎が満鉄にいて、撫順炭鉱の石炭を上海で三井物産に売っているという話を聞いて、「三井と関係があるならば、三井を通してお金を借りてほしい、その交渉をやってくれ」と。当時清朝と対抗していた革命軍および中華民国政府（正式には12年の1月に成立。ただ10月以後別の政権を樹立し清朝から独立したと言っていますけれども）は非常に財政困難になっていまして、武器を補給するにしても、政府の役人に対する給与にしても、とても賄いきれないので、三井物産に金を借りてほしいということを純三郎に要請する。これはある程度成功しそうになります。

湖北省の漢冶萍公司は、石炭の鉱山と鉄の鉱山と製鉄所の3つを兼ね備えた大コンビナートで、清末の洋務運動の時の大変重要な遺産でもあります。当時、鉄と鉄鉱山と製鉄業は重工業の中心ですから、漢冶萍公司を日中合弁とする代わりに、当時のお金で500万円の借款を与えるというふうに話が進みます。1912年2月2日、臨時大総統孫文と、孫文に次ぐナンバー2の黄興が借款条約に署名して印を押します。山田純三郎と三井物産の上海支店長であった藤瀬正次郎が300万円の小切手を孫文に渡します。500万のうち300万は実際に渡されるわけですが、借款条約の中に、「中国における鉱山、鉄道、電気などの事業を外国に許可するにあたり、三井物産に優先権を与える」という内容の条項があったため反対運動があって、この借款は漢冶萍公司の株主総会で否決されてしまい、結局途中で断ち消えになります。この漢冶萍公司の日中合弁というのは、あとで申し上げます21か条条約で日本政府が正式に要求している内容で、これに対しても中国が当時の袁世凱政権を含め、大変反対をします。ある意味で孫文は非常に危ないことをやっているわけです。中国の利権を日本側に提供する代わりに借款をするということですから。まあ切羽詰まっていたということもあるんですけれども。結局これは成立していません。これがまず1つ。

それからもう1つ、山田純三郎が関与しているところで、満州租借を条件とする1,000万円の借款というのがあります。これは1912年2月3日、すでに臨時大総統に就任している孫文と、三井物産のまさに中心である森恪が話し合いをし、その席に中国側から胡漢民、日本側から宮崎滔天、山田純三郎も立ち合っています。森恪は当時の元老であった桂太郎の内意を受けた益田孝の内命を受け、満州保全をする。日露戦争のあとでも依然としてロシアが満州の北部を勢力範囲にしています。それ以外に例えばアメリカも出ようとしてくる。そういう中で満州を保全する。そのために日本に租借をさせるということです。これもよく考えると満州事変の先がけみたいなところがあります。けれども当時は満州保全のために日本に租借をさせる、日本に貸すという形にしておいて他の外国をはねつけようというのが中国側の意図で、その考え方は清末から、清朝の内部でもありました。満州を一任するなら日本側から援助を与えようという満州租借論を孫文は提案します。

孫文はこの時袁世凱との和議が成立する直前で、臨時大総統職は袁世凱に譲る代わりに袁世凱は清朝を滅ぼすということを条件として、袁世凱と孫文達のグループとの和議が成立する時でした。ただ孫文は、ずっと自分に対立していた清朝

の、そのまた中心である袁世凱に政権を譲るということは面白くないわけです。できたらそれを阻止したい。ただし約束ですから臨時大総統は辞職しなくちゃいけない。何とか辞職する前にこれを阻止する手はないかということで、1,000万の借款を要請していたわけです。森恪のこの提案、すなわち中国側から満州を租借させるけれども、その代わり1,000万の借款を日本から与えるということを応諾します。けれども2月8日になっても日本側から応諾の返事は来なかった。つまりある程度出先の段階では話が付いたんですが、政府の正式な応諾の返事が来なかったために実現しなかった。中国国内でも2月12日、袁世凱と孫文のグループとの和議が成立します。その条件に基づいて2月14日臨時参議院（中国の議会のもとになったもの）が孫文の臨時大総統辞任を認め、結局このような交渉は実現できなくなった、流れてしまったということになります。これが2つ目です。辛亥革命の直後の時です。

袁世凱は臨時大総統の職について、孫文達のグループと対立を深めていきます。1912年から13年にかけて中国の最初の議会選挙が行なわれます。中華民国は帝政から、三権分立の共和制国家に変わります。議会は二院制で、それを選挙で選ぶ。12年の末から13年の初めにかけて、初めての選挙が行なわれ、同盟会の流れを汲む国民党（後の中国国民党とは組織的にちょっと別ですが、一応孫文達のグループが中心になっている）が議会第一党になります。大総統すなわち大統領が一番上にいて、内閣総理が行政の中心になるわけですが、内閣総理は議会の多数党がなる。国民党が第一党になりましたので、国民党の当時の議会指導者宋教仁という人物が内閣総理になることになっていました。

ところが、袁世凱は刺客を派遣して宋教仁を暗殺してしまう。もし宋教仁が内閣総理になると、政府の命令は大総統がまず署名して内閣総理が副署をして命令や法律が効力を持つので、国民党系の内閣総理がノーと言えば袁世凱の意のままには政治ができない。それが宋教仁が狙っていたことです。ところが宋教仁が殺されてしまう。宋教仁という人物は日本の北一輝と大変仲がいい。北一輝も辛亥革命の時には自ら南京や上海の戦場に行っています。宋教仁の殺されたあと子供が残ったんですが、北一輝はその面倒をよく見た。北一輝は宋教仁が殺されたあと自分の奥さんに、「宋教仁の亡霊に会った」ということをよく語っていたと言います。それほど仲が良かった。その宋教仁が殺された。もう1つは議会にかけずに勝手に袁世凱が、4国との借款をしたために、とうとう孫文達のグループが怒って武装蜂起をする。これを第二革命と言っています。

4. 第三革命前後

ただしこれは失敗して、孫文は日本に亡命してきます。そして先ほどの陳其美（有吉総領事から拳銃を借りた男）が、袁世凱の背後を突こうということで、北京に都を置いている袁世凱の背後にある満州への工作をしようとした。1914年6月頃、密かに黒龍江方面の反張作霖の軍閥から、張作霖討伐のために孫文と連絡をとりたいという話がある。その結果孫文の命によって、山田純三郎と蔣介石と丁仁傑という人物が満州に出かけます。これについては『蔣介石秘録』というのが台湾側から出ています。この時蔣介石が派遣されたというのは事実のようで、蔣介石も自ら認めていますし、日本側の記録にもあります。山田純三郎の名前は『蔣介石秘録』には出ていません。そのあとも純三郎は満州に派遣されている。陳其美と戴天仇（これも留学生上がりで日本語が大変うまい人物）と共に大連に行って、犬塚信太郎の斡旋によって満鉄病院を本拠に活動しましたけれども、これも成果を挙げられませんでした。

次に日中盟約という問題ですが、台湾のほうは「日中盟約というのは偽物だ、こんな文書はない」と言っているわけです。日中盟約とは何かという

ことを申し上げますと、その内容は「中華陸海軍の使用する兵器、弾薬、兵具は日本と同式、および陸海軍への日本軍人の採用、政府への日本人の採用」です。これは実は正式に申しますと大隈内閣の21か条条約の第5号の内容なんですが、まず21か条に対しては当時の袁世凱政権も反対します。中国国内ではものすごい反対が起きます。日本に留学した留学生達も大反対運動を起こした。そういう中で、袁世凱に対して日本が最終的に兵力を用いるぞという軍事力の脅しをかけて、ようやく認めさせます。

ただしその中でこの第5号については、大隈内閣ですら最終的に削除した内容です。私が今申し上げた点はまさに第5号そのもので、日本政府ですら削除した内容です。ただしそういう部分だけではなくて、中国にとっても有利な、日本側が中国側の関税自主権を回復することとか、領事裁判権の撤廃に賛成すること、これを認めるならば日本側から援助するというのが日中盟約の内容です。これについて孫文と陳其美と山田純三郎と満鉄の犬塚信太郎（この段階では満鉄の理事を辞めていました。この場所にはおらず、後に署名）、この4人が署名しています。実物は今、早稲田の図書館にあると思います。これについての山田純三郎の回想ですが、「今でも某所の金庫の中にその○○の○○は深く蔵されているはずだ。秋山将軍（秋山真之。日露戦争の時に東郷平八郎の下にいた参謀）が書いて、私が持っていって孫さんに手渡した」。そこで署名したということになります。毛筆で書いてあって、台湾の先生は「この文書を見ると明らかに、最後の文書の字のはね方が中国人のものじゃない」と言うんですが、もともと秋山真之が書いているというので、これでは偽物説の決め手とはならないと思います。論争中の決め手となる資料をまだ発掘していないので確定的なことは申し上げられませんが、私はこれは結ばれた可能性が非常に強いと思っています。ただし孫文はまだ政権をとっていなくて日本に亡命の身ですから、ある意味で全然責任がないんですね。それよりも日本側から袁世凱打倒のための援助を引き出せれば目的は果たせるわけですから。

このあとで21か条が出るんですが、21か条の第5号という当時の日本政府ですら削除した内容を孫文が認めたということになってますので、台湾の先生は「国父孫文がそんなことをやるはずがない」ということで偽物説をとっています。私がこのことについて台湾で発表したら、それだけで国民党党史委員会の先生から集中的に質問を受けました。これについて以前に発表した藤井先生は台湾で袋叩きにあったという話を聞いていました。すなわち前日に台湾の先生が打ち合わせをして、偽物説で統一しようということを聞いていましたので、私は挑発に乗らないようにしていましたが。台湾の人はすごく躍起になって、「絶対偽物だ」と言う。私は本物の可能性が強いと思っています。

中華革命党というのは、中国同盟会が第二革命で日本に亡命してきた後、いわば少数精鋭の秘密結社的な革命家の組織としてできました。そこで機関誌として上海の『民国日報』というのが出るんですけれども、その社長に山田純三郎がなっています。『民国日報』では、先ほどの日中盟約のほうが時期的に先なんですが、21か条条約の不当性を大々的に攻撃しています。なおかつ袁世凱が皇帝になろうとする帝政運動を批判している。おそらく山田純三郎が社長になったのは、袁世凱政権の弾圧を招かないためだと思います。ただしこの後の21か条の中で、第5号は日本政府ですらあまりに露骨なので引き下げた内容なんです。それを孫文が認めたことになるんですね、盟約論を本物と信じたとすると。ところが少なくとも公的には21か条大批判をやっているわけです。「国父がそんなことをするはずがない」と台湾は絶対認めない。中国側の先生は割合中立的で、本物とは言わないけれども偽物とも言わない。しかし台湾の先生は、この盟約は偽物だと言っています。

この時期上海のフランス租界にあった山田純三郎の満鉄の社宅は、革命派の実質的な本部になっていました。先ほどからたびたび出てきた陳其美は、山田純三郎の家にいた時、実業家を装って会いにきた中国人にピストルで撃たれて殺されます。その場にいた女中も耳を撃たれて、抱いていた純三郎の長女民子をコンクリートのような固いたたきの上に落としてしまったため、民子は頭に傷を負い、一生涯不具になったというのは有名な話です。それほど山田純三郎は孫文達のグループの内部に密着していました。

5. 広東軍政府以後

孫文は後に広東に戻って広東軍政府というのを立てます。1917年9月に第1次広東軍政府というのが作られて、途中何度か断絶しますけれども、1922年の段階で広東軍政府という形で孫文は南に拠点を築き、袁世凱（1916年に死亡）の部下達の政権に対抗していました。22年6月、広東軍政府を支えていた軍閥の陳炯明が、孫文との意見の対立によってクーデターを起こし、孫文は広州の珠江に浮かんでいた軍艦永豊に逃げ込みます。夏の暑い盛りで、広州市内は全部陳炯明の軍隊が掌握しているわけですが、軍艦のところだけは手出しをしなかった。その時山田純三郎は当時の広東総領事藤田栄助と連絡をとって、食料をわざわざ陸から孫文のところに届けたりしています。

次に犬養宛の書簡のことで当時の時代背景を申し上げると、1917年にロシア革命が起き、1919年に五・四運動が起きますけれども、山東省の青島がドイツから日本の手に継承されて中国に戻らない。それで1919年の5月4日に天安門広場で北京の大学生達が、青島を中国に返せというデモをやる。これは学生が中心になって、それからどんどん広がっていきます。やがて学生だけではなくて都市の商人が日本製品のボイコットをやっていく。労働者はストライキで呼応してくるという大規模な運動になって、結局この時には青島は中国に戻りませんでしたけれども、中国は第1次世界大戦の戦勝国であるにも関わらず、自己の領土が戻らなかったと怒ったわけです。ベルサイユ条約で青島は中国に戻らないと決められていましたので、この態勢はすぐには変えられない。ただし中国の全権はベルサイユ条約の調印を拒否しています。つまり国家としてこれは認めないという意思表示をして中国に帰ってくる。孫文は、従来革命をやる時に、日本との関係で言うと非常に危ない橋を渡っているところがあるわけです。つまり中国の利権を提供する代わりに日本の援助を、というようなことですが、それが五・四運動以後そういう外からの力に依存する、外力依存というのが変わってきます。

どういうふうに変わったかと言うと、だいたいロシア革命と五・四を契機にして、いわば革命というのはみんながやらなくちゃいけないんだ、とりわけ労働者・農民が中心にならなくちゃいけないんだというふうに変わってきます。そうすると危ない橋を渡りつつ日本の援助を期待するということから変わってしまう。そういう中でこの犬養宛書簡は出されます。犬養毅も一貫して中国との関わりの強い人です。後の五・一五事件で暗殺されますけれども。孫文の支援者の1人でもあった。1923年11月の第2次山本権兵衛内閣に、その犬養が逓信大臣として入閣するという話を孫文が聞くと、山田純三郎に託して犬養宛書簡を書きます。実際24年1月にこれは手渡されています。

そこでどういうことを言っているかと言うと、「日本は苦しめられている人々の友となるために、第1、中国の革命を援助して成功させ、内に統一を、外には独立を可能ならしめ、列強による束縛を打破すること」。これは実は東亜同文書院の最初の設立趣旨を本気になってやるなら、こういう路線に繋がる考え方だと思います。本気になってというのは、日本政府の政策と対立しても、という意味です。それから「第2、ソビエトロシア政

府を列強に率先して承認すること」という内容です。特に日本が中国の革命を援助するだけではなく、列強による束縛を打破せよと、日本政府の対中・対ソ政策の転換を求めました。しかし犬養は結局この文書を公表することもなく、日本政府の対中・対ソ政策の転換もなされませんでした。現在この文書は『孫中山全集』あるいは台湾の『国父全集』に収められていますが、最初に「山田純三郎君が来て言うことには」というふうな文章がありまして、山田純三郎が「犬養が入閣した」というのを伝えている。それを聞いてこういう書簡を出した。

6. 国共合作後

1924年1月、国民党と共産党が一緒になって合作しますが、その後第二次奉直戦争で奉天派と直隷派が戦います。奉天は現在の遼寧省で、リーダーは張作霖です。直隷は現在の河北省です。軍閥のリーダーの出身地で奉天および直隷と言っています。直隷派の代表的なのは呉佩孚です。段祺瑞と張作霖の2人はいわゆる親日派なんです。結局、第二次奉直戦争では直隷派が負けまして、段祺瑞が臨時執政になって政権を握ります。孫文は南の広東にいて、張作霖と会談をするために北上していく。12月4日に天津に着いたあと張作霖と会うんですが、もともと張作霖と孫文とはずっと対立していたわけで、孫文に会った時に張作霖が孫文を捕まえないようにということで、山田純三郎は事前に、張作霖に付いていた町野武馬という日本人に会って、張作霖が孫文を拉致することのないようにと、孫文の身の安全保証を求めています。

孫文は1925年3月12日に北京で肝臓癌のため亡くなります。亡くなる時に、純三郎の従弟の菊池良一、宮崎滔天（すでに死亡）の兄民蔵、それから萱野長知等と共に病院で立ち合っています。東亜同文書院大学記念センターには、山田純三郎は孫文の臨終の時に立ち合った唯一の日本人だと書いてあるんですが、唯一ではないと思いますので、これはあとでちょっと関係者の人に小さい声で言っておきます。

おわりに

最後に孫文の山田兄弟に対する評価として、孫文の文章ですが「それ革命のために奔走して終始怠らない者は、山田兄弟、宮崎兄弟、菊池、萱野とあり」（『建国方略』1918）と言っています。前にも申し上げたように、大陸浪人と言われる人達で孫文を支援した人がたくさんいるんですけれども、特に五・四運動以後になると、だいたいそういう連中の多くが、1つは日本の利権拡大と結びついて動き、純粋に中国革命を支援していないということとか、自らの売名行為のような、要するに「俺は孫文を援助して大いに影響力があるんだ」というようなことを吹聴し回るのがいるわけで、そういうのが嫌になってしまった。もちろんそういう中で、ある種選別をし、信頼をおいていた人達もいるわけで、そのうちの1人が山田兄弟だろうと思います。信頼を得た理由として、良政が大変短い間でしたが孫文の指導する中国革命に参加して、惠州蜂起で一命を捧げる。弟純三郎は中国革命に参加することによって、今申し上げた一部の軍人や政治家のように、見返りに会社や国家の利権拡大を求めなかった。純三郎はずっと満鉄の社員で通しています。けれども彼は満鉄の利権拡大のために孫文との交渉をやったことは一切ない。むしろ1910年代に1度満鉄を辞めようとしています。自分が孫文と付き合っていると満鉄に迷惑をかけるんじゃないかと考え、一個人として参加しようとした。でも満鉄は懐が深いと思うんですけれども、「何も満鉄という会社は、会社に出てきてする仕事ばかりが仕事じゃない。お前のやってることも立派な仕事だ」と言って、結局出てこないで孫文の革命を支援する人間に、ずっと給料を出している。

そういうふうに会社や国家としての利権拡大を求めなかったことが、孫文に信頼された理由だと思います。それから山田純三郎は日本人としての立場を利用して、中国人革命家にはできない役割を果たしました。先ほどの中華革命党の機関誌である『民国日報』の社長になったのは、日本人が社長である新聞という形をとることによって、袁世凱に手出しをさせないようにするためです。また張作霖の顧問であった町野武馬と日本人同士で事前に話をつけて、張作霖が孫文を拉致しないようにという保証を得ました。

東亜同文書院の思想というのはまさにアジア主義だと思います。ただしやはり日本中心というのが問題なのであって、脱亜入欧論に対して、つまりアジアから脱け出し欧米をモデルにしようという日本の国家や言論界の主流の思想に対抗してのアジア主義だと思います。日本中心主義というのは、特に1941年以後、すなわちアジア太平洋戦争以後の大東亜共栄圏というのでは破綻していると思います。ただし日本中心でないアジア主義というのは、もう1度見直す必要があるだろうと思います。そこに現在の東アジア共同体論という形に繋げる思想的素地があるだろうと思っています。東アジア共同体を実現するのは非常に難しいですが、アジア主義をちゃんと見直す必要は、現在でもあるだろうと私は思います。

以上若干時間が超過しましたが、私の報告とさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。少しお時間がございますので、何かご質問のある方はお手を挙げてください。ございませんでしょうか。それでは本日の講座はこれで終了させていただきます。馬場先生にもう1度拍手をお願いいたします。次回の講座は10月20日（土曜日）午後2時より行ないます。愛知大学が保有しております東亜同文書院関係の貴重な資料・写真と、愛知大学創成期の歴史に関する展示をご覧いただく予定でございます。集合場所は大学記念館という、正門を入ってすぐの白い木造の建物になりますのでご注意ください。それでは以上で終わりたいと思います。お気をつけてお帰りください。ありがとうございました。

主要参考文献

馬場毅「孫文と山田兄弟」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第126号）2005年
結束博治『醇なる日本人―孫文革命と山田良政・純三郎―』プレジデント社　1992年
保阪正康『仁あり義あり、心は天下にあり―孫文の辛亥革命を助けた日本人―』朝日ソノラマ　1992年